

Neglect-Like Symptomsを示した開大式高位脛骨骨切り術後症例の歩行時痛に対する足底触覚識別課題の効果 - シングルケースデザイン -

○高石 翔¹⁾

1) 川田整形外科

【はじめに】

術後痛に影響を及ぼすNeglect-Like Symptoms (NLS) に身体表象の障害が関与する可能性があるが (Bultitudeら, 2010, 平川ら, 2013), 体系的な治療は確立していない. 今回, 開大式高位脛骨骨切り術 (HTO) 後に歩行時痛があり, NLSを示した症例に対し, 身体表象の再構築が歩行時痛を改善させるかシングルケースデザインにより検討した.

【症例】

左変形性膝関節症に対してHTOを施行した50代女性である. 介入前にはNLSを示し (NLSスコア153), 歩行では左荷重応答期から立脚中期での体幹左側屈や左立脚中期から立脚終期での過度な骨盤後方回旋を認め, 「頑張って内側に戻そうとしてる」と記述していた. 端座位では下肢の垂直性を誤認していたが, 足底での接触情報の認識は可能であった.

【方法】

研究デザインにはABACABデザインを採用した. 課題は1日に2種類ずつ行い, 期間は3日間とした. 課題Aはヒールスライドとし, 課題Bは毛足の異なる素材を足底で識別させる課題とした. 課題Cでは, 課題Bと同じ素材を敷いた状態で左膝関節を他動的に屈伸させた. なお, 課題Bでは足底の内外 (1回目) または前後 (2回目) に敷いた2種類の素材が何かを問うた. 各課題の時間は10分間とし, その前後にはTimed Up & Go Test (TUG) とVisual Analogue Scale (VAS) による歩行時痛を評価した.

【結果】

課題A1回目実施前後および課題B1回目実施後のTUGとVASは各々8.6秒, 27mm, 8.4秒, 29mm, 8.0秒, 17mm, 課題A2回目実施前後および課題C実施後では8.3秒, 31mm, 8.5秒, 34mm, 8.6秒, 31mmであり, 課題A3回目実施前後および課題B2回目実施後は8.4秒, 32mm, 9.0秒, 35mm, 7.4秒, 16mmであった. 課題B2回目実施後の歩行時には「(頑張って内側に戻す感じは) なくなった」「痛みがマシ」との記述があり, 跛行は改善傾向にあった. 介入終了時のNLSスコアは0であった.

【考察】

HTO後に歩行時痛を訴えた症例に対して足底触覚識別課題を行った結果, 即時的な疼痛改善効果が得られた.

【倫理的配慮(説明と同意)】

症例には研究の目的および内容を説明し, 同意書を作成した.